

Letter for Members

【コンテンツ】

- JPS student clinical skills competition..... 1
- 令和6年度定時総会、臨時総会..... 2
- 渉外委員会報告..... 3
- 第133回学術大会..... 4
 - 一第133回学術大会開催
 - 一令和6年度専門医研修会報告
 - 一シンポジウム開催報告
 - 一市民フォーラム開催報告
- 受賞者の声..... 10
 - 令和5年度学会優秀論文賞
 - 学会論文賞
 - 奨励論文賞
- JPR Best Paper Award Review Article 部門
- JPR Best Paper Award Original Article 部門
- 第133回学術大会優秀賞
 - 課題口演賞
 - 課題口演優秀賞
 - 優秀ポスター賞
- Prosthodontic Meeting for Next Generation 2024 開催報告..... 22
- JSPEN との調印式..... 23
- 補綴関連講座・分野新教授紹介..... 24

第6回 JPS SCSC (Student Clinical Skills Competition) 開催報告

日本補綴歯科学会が主催する、歯学部学生の臨床技能向上を目的とした JPS SCSC (Student Clinical Skills Competition) が今年も開催されました。全国の歯科大学・歯学部から学生代表者1名を推薦していただき、指定された課題（上顎左側中切歯のハイブリットレジン CAD/CAM 冠を想定した支台歯形成）について一次審査が行われました。今年は26校が参加し、一次審査を勝ち抜いた上位6名が6月2日にモリタ Dental Plaza Tokyo で行われた二次審査に臨みました。2019年より開始された JPS SCSC は今年で6回目となりますが、昨年までとは異なる会場での開催となりました。会場となった株式会社モリタの方々には大変ご尽力いただきましたことをこの場を借りて深く感謝申し上げます。

二次審査は、ファイナリストとなった学生6名が朝9時に集合し、澤瀬 隆学術委員長より開会の挨拶、窪木拓男理事長より熱い激励を受け、二次審査（30分間の支台歯形成）に臨みました。母校とは異なる環境で緊張や戸惑いもあったことと思われそうですが、無事形成を終えてほっとした様子の学生たちが印象的でした。回収された人工歯は直ちにスキャンされ、形成前後の STL データから算出したクリアランスや軸面テーパ角等の分析が行われました。学術委員会および教育問題検討委員会の両委員会から構成された6名の審査員が完全なブラインド審査を行い、集計して総合評価しました。また、審査中

の時間を利用して、学生は窪木理事長の講義「デジタルデンティストリーが包括歯科診療において必須な理由」を受講しました。その後、館内ショールームツアーでは、最新のデジタル機器の説明に熱心に耳を傾け、目を輝かせていました。

審査結果は以下の通りとなりました。

- 最終選考最優秀賞1位：兵頭正子さん（東北大）
- 最終選考最優秀賞2位：阿瀬健太さん（徳島大）
- 最終選考最優秀賞3位：植木友美さん（長崎大）
- 最終選考優秀賞：青木直美さん（新潟大）、
平井由衣さん（鶴見大）、
山田大貴さん（昭和大）

審査は、各審査委員の点数を合計して順位を決定しましたが、いずれも僅差で甲乙つけ難く、非常に優れた6名の技能が発揮された結果だと考えます。これもひとえに、日々の鍛錬の賜物で、ぜひ、学生には今回のコンペティションを通過点に、将来の歯科界を担う人材として、これからも努力を重ねてほしいと思います。

最後になりますが、ご引率いただいた先生方と、協賛いただいたストロマン・ジャパン株式会社、ペントロンジャパン株式会社、医歯薬出版株式会社、ノーベル・バイオケア・ジャパン株式会社、和田精密歯研株式会社、株式会社ジーシー（順不同）に深く感謝申し上げます。
(SCSC 事務担当 張 暁旭 右藤友督)



実技前に機材の説明を受ける学生たち。



緊張感のなか30分間の形成が始まる。



表彰式後の集合写真。今後の活躍に期待したい。

令和6年度公益社団法人日本補綴歯科学会定時総会，臨時総会

令和6年度公益社団法人日本補綴歯科学会定時総会は2024年6月15日(土)にWeb出席形式にて、令和6年度公益社団法人日本補綴歯科学会臨時総会は2024年7月5日(金)に幕張メッセにて対面形式にて執り行われました。公益社団法人として「令和5年度計算書類(貸借対照表および正味財産増減計算書)および財産目録承認の件」を6月末までに総会にて承認する必要があるため、本年度は年2回総会を開催する形とさせていただきます。両総会共に多くの社員の皆様に参加いただきました。

定時総会では議長は神奈川歯科大学の木本克彦先生が務め、司会は総務が担当する形にて進行させていただきました。報告事項として、令和5年度事業報告の件を総務より報告し、決議事項として令和5年度計算書類(貸借対照表および正味財産増減計算書)および財産目録承認の件、名誉会員推薦に関する件、2年以上会費未納に伴う会員の除名の件についてお諮りさせていただき、承認多数で可決されました。本来ならば所掌の理事、委員長から委員会活動報告を行いますが、7月に開催される学術大会時の臨時総会にて執り行われていただく予定としており、定時総会では定

款にて定める事項を決議するのみの形式とさせていただき、無事に閉会となりました。

臨時総会では議長は東北大学の服部佳功先生が務め、司会は総務が担当する形にて進行させていただきました。窪木拓男理事長からのご挨拶の後に、報告事項として、総務より令和6年度事業計画を、各委員長より令和5年度および令和6年度4-6月期における所掌委員会の活動報告がされました。最後に村田比呂司第134回学術大会大会長より挨拶が述べられ、無事に閉会となりました。臨時総会終了後、規程に基づき、第133回学術大会大会長への感謝状贈呈、新規名誉会員への名誉会員称号記の贈呈、学会特別功労賞の贈呈、学術賞の表彰、学会論文賞、および奨励論文賞の表彰が執り行われました。

最後に、定時総会にて議長として円滑に議事を進めていただきました木本克彦先生、臨時総会にて議長として円滑に議事を進めていただきました服部佳功先生、ご出席いただきました社員の皆様、本学会会員の皆様にご場をお借りしてあらためて深く御礼申し上げます。(総務担当 小見山 道)



臨時総会



臨時総会後の表彰(名誉会員)

渉外委員会報告

日本補綴歯科学会会員の皆様、こんにちは。さて突然ですが、渉外委員会がどのような仕事をしているかご存じでしょうか？私は昨年度より渉外委員会に参加しておりますが、それまで活動内容をあまり意識していませんでした。今回この場をお借りして、渉外委員会の活動について簡単に紹介をさせていただきます。

委員会の活動方針は「協定を基盤とした海外学会、これまでの交流実績のある海外学会との連携推進・海外派遣招待講演者の選定・学術大会開催案内・海外からの参加者支援」です。具体的には、The Indian Prosthodontic Society (IPS) や The Pacific Coast Society for Prosthodontics (PCSP) の学術大会への演者派遣、また IPS からの短期留学希望者の受入先調整（受け入れてくださった先生方、ありがとうございました）などありましたが、特に印象深かった仕事として第 8 回日中韓合同補綴学会 (The 8th CPS-JPS-KAP)、また The 14th Biennial Congress of the Asian Academy of Prosthodontics (The 14th AAP) がありました。

日中韓合同補綴学会は隔年開催で、3 か国の持ち回りで開催されています。本年開催された The 8th CPS-JPS-KAP は The Chinese Prosthodontic Society (CPS) が主管を務め、中国の広州で開催され、日本補綴歯科学会 (JPS) から 6 大学 24 名が座長・演者として参加しました。私個人としては初めて

の訪中であり緊張もありましたが、入国して広州の都市部に近づくにつれ、大きな建物、美しい街並みが広がっていて安心したことを覚えています。CPS からの熱烈な歓迎を受け、また The Korean Academy of Prosthodontics (KAP) も含め 3 か国の気鋭の講演を拝聴し、素晴らしい経験となりました。以前、中国から本学に留学していた者も学会に参加しており、再会できたことも良い思い出です。

The 14th AAP は日本補綴歯科学会第 133 回学術大会共催として開催されました。今年の補綴学会は海外からの参加者が多いな…と思った方も、少なくなかったものと思います。今回、アジア 16 か国 / 地域から 177 名の方にご参加いただき、また英語演題数もおよそ 100 件ありました。JPS が主催する、各国の代表演者によるコンペティションである Hiranuma JPS Awards, JPS-AAP joint session として PCSP Special Lecture も企画しました。アジア各国の最新の動向を知ると共に、今後もアジアの補綴研究を JPS がリードしていきたいと改めて感じました。

今後も渉外委員会は日本と世界各国の学会の架け橋となり、会員の皆様には有益な情報、講演など提供していきたいと考えています。ご要望などありましたら、ぜひご意見をお寄せください。

(渉外委員会幹事 瀨 洋平)



14th AAP 懇親会



第 8 回日中韓合同補綴学会、日本補綴歯科学会からの参加者

第133回学術大会報告

2024年7月5日(金)から7日(日)の3日間に渡り【補綴の未来、歯科の未来。「不易流行(変わらないもの、変えていくもの)」】をテーマに、公益社団法人日本補綴歯科学会第133回会学術大会を幕張メッセ国際会議場にてハイブリッドで開催致しました。また、今回はThe 14th Biennial Congress of the Asian Academy of Prosthodonticsの共催学会であり、賑やかで国際色豊かな学会でもありました。まずは本学術大会開催にあたり、多くの企業様ならびに法人様よりご協賛いただきましたこと厚く御礼申し上げます。また、大会の運営にご尽力いただきました(株)キョードープラス、(株)Atlas、(株)Doctorbookおよび(株)幕張メッセの皆様にお世話になりましたこと、心より御礼申し上げます。お陰様で、7月21日のオンデマンド視聴を持ちまして無事盛会裏に終了致しましたのでご報告いたします。

7月5日、大会初日は総会、住友雅人日本歯科医学会会長の講演のほか3件のシンポジウム等が行われた後に308名のご来賓、シンポジスト、法人・企業さま、名誉会員・会員等のご参加をいただき、ホテルニューオータニ幕張で意見交換会が開催されました。窪木拓男理事長、河相大会長の挨拶に続き、ご来賓を代表し、公益社団法人日本歯科医師会会長の高橋英登先生、一般社団法人千葉県歯科医師会会長の大河原伸浩先生よりご祝辞を頂戴致しました。名誉会員の赤川安正先生から乾杯のご発声から、大久保力廣 副理事長の閉会のご挨拶まで、和気藹々の雰囲気の中、翌日の大会へ向け有意義な意見交換の場となったのではないのでしょうか。7月5日および6日は学術委員会が中心となり、テーマに沿った特別講演やシンポジウム等をご準備い

たいただきました。どれも非常に充実した内容となり、最新の学術および臨床知見について活発な意見交換が会場で繰り広げられていました。中でも、海外特別講演はMcGill大学のFeine教授から「オーラルヘルス研究における異分野融合型研究から実装へ」、特別講演を医療法人社団悠翔会の佐々木淳理事長より「人生の終い方～最終ステージの伴走者としての在り方～」という内容で、「不易流行」の核心に触れたご講演となり、参加者に深い印象を残しました。そのほかにも日本栄養治療学会合同シンポジウムやハンズオンセミナー、課題口演と一般口演、イブニングセミナーなどを通じて参加者の皆さまに「変わってはいけないこと、変わらなければならないこと」の示唆を与える機会となったのではないのでしょうか。ここに学術大会の充実にご貢献をいただきました座長、演者の皆さまに深く感謝と敬意を表する次第です。

今回の学術大会は参加者2,889名(うちAAP参加登録172名)と多くの登録をいただきました。折しも酷暑の中、会期を通じて多くの方が会場に留まり講演や企業展示等に足を運んでいただきました。また閉会式は例年以上のJPSとAAPメンバーにご参加いただき、大変な盛り上がりの中行われ、最後に長崎県の出島メッセで開催されます第134回学術大会について村田比呂司大会長の代理で長崎大学の澤瀬 隆準備委員長からご案内いただき、大会を締めくくることができました。ぜひ第134回学術大会へ多数のご参加をいただきますとともに、補綴歯科学会のさらなる発展を祈念し、第133回学術大会のご報告とさせていただきます。皆様、ご参加とご協力いただきまして、誠にありがとうございました。(大会長 河相安彦)



大会校集合写真



海外特別講演 Feine 教授に感謝状

●第133回学術大会における令和6年度専門医研修会報告

第133回学術大会は河相安彦・日大松戸特任教授を大会長として2024年7月5日(金)～7日(日)の日程で千葉県・幕張メッセにて開催されました。この会期中、7月6日に「フィニッシュラインからみる歯冠修復」、7月7日に「下顎位を再考する—補綴・歯周・矯正の観点から—」の2件の専門医研修会を実施しました。

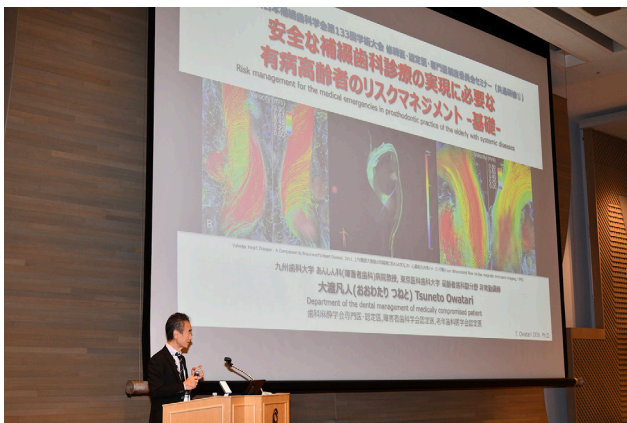
「フィニッシュラインからみる歯冠修復」では、佐藤洋平先生(西関東支部/鶴見大)、野本俊太郎先生(東歯大)を座長に河阪幸宏先生(東北大)、新谷明一先生(日歯大)および木林博之先生(関西支部)を講師として90分のセッションを行いました。このセッションでは、フィニッシュラインを生体と補綴装置の接点と捉え、直接法と間接法修復、クラウンなどの種々のフィニッシュラインからみる補綴歯科治療の勘所と現在のトピックスを整理していただきました。

「下顎位を再考する—補綴・歯周・矯正の観点から—」では、小見山 道先生(日大松戸)と私を座長に、古谷野 潔先生(九州大)、高橋慶壮先生(奥羽大)お

よび藤山光治先生(ふじやま矯正歯科)を講師として100分のセッションを行いました。このセッションでは、補綴、歯周、矯正・審美の観点から見た下顎位をご講演いただき、下顎位を再考する貴重な機会となりました。

日本歯科専門医機構による補綴歯科専門医制度の認証に伴い、生涯学習の重要性はますます高まっています。補綴歯科専門医として持つべき補綴領域の知識や技能は専門医研修会から、すべての専門医が共通して保有しておくべき知識や技能は共通研修を通して習得することとなっており、本第133回学術大会でも2単位分(計130分)の共通研修(医療安全および医療倫理)を実施しました。一度の学術大会へのご参加で共通研修2単位と専門医研修4単位が取得できますので、学術大会でのこれらの研修会のご参加をお待ちしております。また、オンラインでの専門医研修会、共通研修も別途準備しておりますので、事情があり学術大会に参加できなかった先生も生涯学習の場としてオンライン共通研修・専門医研修会へのご参加をお待ちしております。

(修練医・認定医・専門医制度委員長 鮎川保則)



修練医・認定医・専門医制度委員会セミナー講師の大渡先生



セミナー時の会場の様子

●シンポジウム開催報告

●メインシンポジウム

「日本栄養治療学会 合同シンポジウム 補綴歯科治療と栄養治療の新たな連携戦略」

座長：古屋純一（昭和大）

石井良昌（座間総合病院）

シンポジスト：窪木拓男（日本補綴歯科学会／岡山 大）

鍋谷圭宏（日本栄養治療学会／千葉 県がんセンター）

石井良昌（座間総合病院）

古屋純一（昭和大）



本会は、日本栄養治療学会（JSPEN）と協定を締結し、そのキックオフシンポジウムとして第133回学術大会にて合同シンポジウムを開催いたしました。両学会から座長と演者をご選出いただき、栄養と口腔機能に関する知見をご提示いただき、意見交換を行い、今後のさらなる連携の推進を確認いたしました。今後も相互の学術大会において、合同シンポジウムが企画されています。医科系の学会との協定締結や合同シンポジウムは本会としても新たな動きであり、お互い文化の違いを乗り越えて、相互により影響を与えていただけると確信しております。（古屋純一）

●シンポジウム 1

「口腔機能と栄養摂取からみた補綴歯科治療の意義」

座長：池邊一典（大阪大）

上田貴之（東歯大）

シンポジスト：佐々木 敏（東京大）

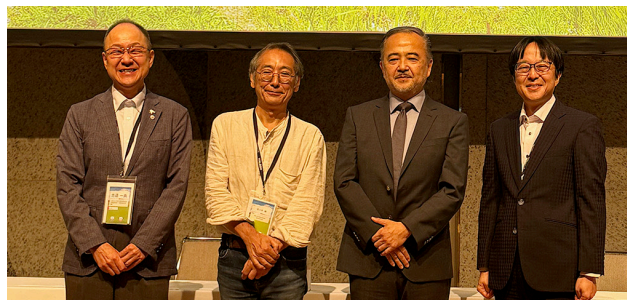
：平野 浩彦（東京都健康長寿医療センター）

食事を通じた疾病予防を専門とする栄養疫学研究の第一人者である佐々木先生からは、「歯科学も栄養学もすべての人の健康を静かに支える学問です」とのメッセージと栄養学と歯科補綴学の真の専門家同士としての協働の重要性をご教示いただきました。日本老年歯科医学会理事長で、要介護高齢者に対する口腔機能回復と摂食支援のエキスパートである平野先生からは、日本初の概念であるオーラルフレイルについての最新の動向とエビデンスを詳細に紹介いただきました。補綴歯科学と栄養疫学の連携による研究や補綴治療の果たす役割と今後の向かうべき方向性について理解を深めることができるセッションとなりました。

（池邊一典，上田貴之）



総合討論の様子



シンポジウム終了後の集合写真（左から池邊，佐々木先生，平野先生，上田）

●シンポジウム2

「クラウンブリッジにおける補綴材料を再考する
～金属・陶材・ジルコニアは臨床でどのような影響を
与えるか?～」

座長：梅原一浩（東北・北海道支部）

馬場一美（昭和大）

シンポジスト：伴 清治（愛院大）

永田省蔵（九州支部）

近藤尚知（愛院大）



本シンポジウムでは、「不易流行」というテーマのもと新旧補綴材料について、金属、陶材、ジルコニアの3材料それぞれの選択基準、長期経過、今後の課題についてご講演いただきました。現在臨床応用頻度の高まったジルコニアにおいては、材料学的に生体親和性が高く欠点の少ない材料ですが、鏡面研磨することが最重要であり、今後は長期経過報告が必要であることが討論されました。興味あるテーマだったようで、会場には沢山の先生方に参加していただき、有意義なシンポジウムとなりました。

（梅原一浩，馬場一美）

●シンポジウム3

「セラミック修復最前線」

座長：正木千尋（九歯大）

三浦賞子（明海大）

シンポジスト：日高豊彦（西関東支部）

大谷一紀（東京支部）

佐藤洋平（西関東支部／鶴見大）



本シンポジウムでは「セラミック修復の最前線」と

題して、3名のセラミック修復の経験豊富な先生方にご講演いただきました。過去から現在までの歯冠修復に関する治療の変遷を踏まえた修復材料の選択基準やジルコニアを用いたシングルリテーナーを用いた接着ブリッジの有効性、さらにはオクルーザルベニアやアディショナルベニアの可能性などが示されました。会場内は立ち見ができるほどの多くの来場者があり、また、質疑応答においても時間が足りなくなるほど多くの質問をいただき、最後まで大変盛り上がるセッションとなりました。

（正木千尋，三浦賞子）

●シンポジウム4

「英語論文の執筆・査読，国際学会発表の勘どころ」

座長：江草 宏（東北大）

中島純子（東歯大）

シンポジスト：江草 宏（東北大）

猪越正直（医歯大）

押味貴之（国福大）



COVID19の5類移行から1年、海外学会に現地で開催される機会も多くなりました。また、JPRをはじめ英文雑誌への投稿の機会も少なくありません。本企画ではJPR編集方針や英語論文を書く順番やDiscussionの書き方、そして英語でのプレゼンテーションに向けての3 Minutes Thesis, Chat GPTの有効な活用方法、画期的なポスターのレイアウト等を非常に分かりやすく解説をしていただきました。参加された先生方からは勉強になった、オンデマンドの視聴を講座員に勧めるなど好評をいただき、有意義なセッションとなりました。

（中島純子）

●シンポジウム 5

「咀嚼・咬合によるメカノバイオロジー：咀嚼・咬合力は体にどんな変化をもたらすか？」

座長：江草 宏 (東北大)

二川浩樹 (広島大)

シンポジスト：黒嶋伸一郎 (北海道大/長崎大)

大島 正充 (徳島大)

澤田 泰宏 (国立障害者リハビリテーションセンター)

本シンポジウム(咀嚼・咬合によるメカノバイオロジー)では、黒嶋伸一郎先生から咬合荷重分配を最適化することで骨質を高めるインプラントデザインについてお話いただき、大島正充先生からメカニカルストレスが歯根膜の誘導や歯胚発生に及ぼす影響を例に、能動力覚のメカノメディシン応用の可能性をお示しいただきました。最後に澤田泰宏先生から運動時に頭部に生じる上下方向の加速度による血圧改善の研究成果と、その供給源として咀嚼に注目した研究をご紹介いただきました。質疑応答では、咀嚼によるメカニカルストレスが体に及ぼす新たな視点が提起され、とても充実したシンポジウムとなりました。

(江草 宏, 二川浩樹)



左から江草 (座長), 黒嶋先生, 澤田先生, 大島先生, 二川 (座長)

●シンポジウム 6

「生体模倣のその先へ

～補綴とバイオミメティクス～」

座長：西村正宏 (大阪大)

秋葉陽介 (新潟大)

シンポジスト：松本卓也 (岡山大)

山田将博 (東北大)

補綴歯科は、人工材料により生体を模倣し、形態、機能を再現・回復すること(バイオミメティクス)を基本としています。補綴関連研究においても、生体の詳細な解析や、生体機能の再現は生体模倣を目的としていると考えられることから、本シンポジウムを企画しました。山田先生には生体模倣研究の総論的なお話から、ご自身の研究について、松本先生には生体模倣材料開発のコンセプトと、それに基づいたご自身の素晴らしい材料開発研究についてお話いただきました。お二人の研究、そして結果の実装に向けた情熱溢れるご講演に大変感銘を受けました。今後も補綴領域から素晴らしい研究が発信されることを信じて報告を終えさせていただきます。

(西村正宏, 秋葉陽介)



シンポジウム6の様子

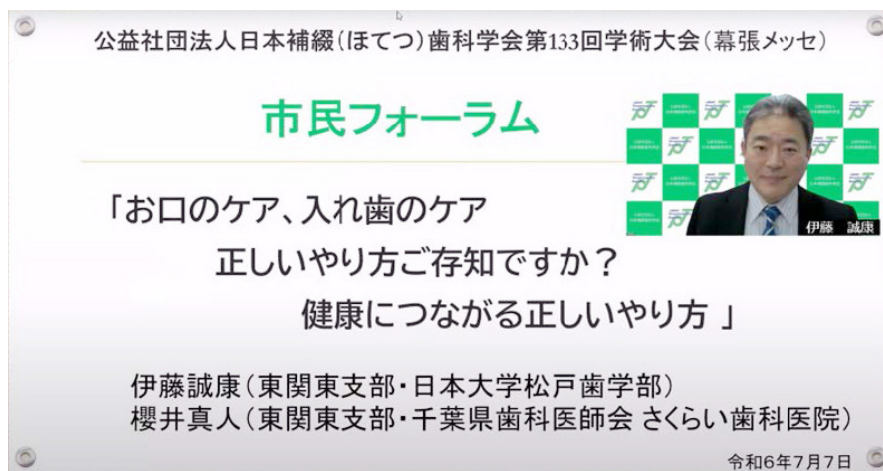
市民フォーラム2024

●市民フォーラムのご報告

公益社団法人日本補綴歯科学会第133回学術大会(大会長：河相安彦，幕張メッセ，2024年7月5日(金)～7日(日))において，市民フォーラム2024がWeb配信(配信期間：2024年7月5日(金)～7月21日(日))されました。「お口のケア，入れ歯のケア正しいやり方ご存知ですか？健康につながる正しいやり方」というタイトルで，日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座 教授の伊藤誠康先生の進行のもと，まず伊藤誠康先生が「正しい入れ歯のケア(お手入れ)」についてご説明いただき，続いて千葉県四街道市でご開業の櫻井真人先生による「正しいお口のケア」についてご講演が行われました。現在でも多くの義歯が使用されていることから，伊藤先生はそれら義歯の種類と設計に合わせた清掃方法について，適切な器具機材の選択から使い方と清掃後の保管方法までわかりやすくお話し下さいました。また，残存歯へのケアの重要性も言及していただきました。これら義歯と口腔内を正しくケアすることで，口腔機能の回復とQOLの向上につながることをご説明いただきました。

櫻井先生からは，まず千葉県歯科医師会が2018年に立ち上げた8029(ハチマルニク)運動についてご紹介いただきました。「80歳になっても肉をはじめとした良質なたんぱく質を食べることで，健康な高齢者を増やしていこう！」という運動です。さらに，筋力トレーニングの方法について詳しくご説明いただきました。健康な口腔内を保つことで，栄養をしっかりと摂取でき，その結果，全身の筋肉量を保つことができます。そして，さまざまなフレイルの予防へとつながること，すなわち口腔の健康が国民すべての健やかな生活に貢献できることをご紹介されました。Web配信の期間は17日間と設定したことから，多くの市民に伝えることができ，素晴らしい市民フォーラムとして成功裏に終わりましたこと，関係各位にこの場を借りて深く感謝申し上げます。ちなみに，本市民フォーラムは日本補綴歯科学会のホームページの市民フォーラム2024(<https://hotetsu.com/p7.html>)から現在でも拝聴が可能です。お見逃しの方は，ぜひご覧いただき，患者さん等にご紹介いただけると幸いです。

(社会連携委員長 新谷明一)



公益社団法人日本補綴歯科学会第133回学術大会にて配信された市民フォーラム2024

令和 5 年度学会優秀論文賞, 第 133 回学術大会優秀賞 受賞者の声

令和 5 年度 優秀論文賞



神野洋平 (九州大)

Impact of salivary contamination during implant placement with different surface characteristics in native and augmented bone: An in vivo study in sheep calvaria model
Clin Oral Implants Res 2023; 34(3):

254-262.

この度は令和 5 年度優秀論文賞に選出していただき、大変光栄に存じます。本研究は、私がスウェーデンのマルメ大学に留学中に行った研究です。

私はこれまでオッセオインテグレーション獲得に関する研究に携わってきました。長期予後においても高い成功率が報告されているインプラント治療ではありますが、早期のインプラント体脱落は臨床現場で未だ散見される事象です。患者からの信頼を失いかねない大きな問題であると考え、より良い埋入術式についてさまざまな観点から検討を行ってきました。本研究では、術中のインプラント体表面へのコンタミネーションがオッセオインテグレーションに与える影響についてヒトに用いるサイズのインプラント体を大動物に埋入し組織学的検討および組織形態計測学的検討を行いました。唾液のコンタミネーション下では骨インプラント接触率が減少し、骨増生部位では既存骨部位と比較してその影響が顕著であることがわかりました。現在インプラント体の表面性状は中等度粗面が一般的ですが、唾液のコンタミネーション下でも、中等度粗面のインプラント体が機械研磨表面のインプラント体と比較してより高い骨インプラント接触率が得られることが示唆されました。

最後になりましたが、本研究の遂行に多大な貢献をいただいたマルメ大学の共著者に心より感謝申し上げます。そして研究の立ち上げ時に多くの支援をいただいた元マルメ大学准教授の神保 良先生および同時期に留学した元徳島大学の内藤禎人先生にも厚く御礼申し上げます。



黒嶋伸一郎 (北海道大/長崎大)

太田 祥一 (東北・北海道支部)

Implant-assisted removable partial dentures: Part I. A scoping review of clinical applications

J Prosthodont Res 2024; 68 (1): 20-39.



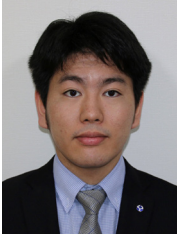
この度は令和 5 年度公益社団法人日本補綴歯科学会優秀論文賞(学会論文賞)に選出していただきまして、大変光栄に存じます。

本総説論文は、インプラントパーシャルデンチャー (Implant Removable Partial Denture: IRPD)

に関するスコーピングレビューの形式となっています。スコーピングレビューとは、現時点では複雑な問題が多く、システムティックレビューの適用が難しい領域の問題点を広範囲に文献検索し、現在の科学的到達点と問題点の抽出を試みる形式の論文です。IRPD は 1990 年代初頭に登場しましたが広くは普及せず、科学的情報が少ない状況でした。しかしながら、世界的な人口動態の変化や、歯や歯列の欠損をインプラント治療で補いつける難しさなどから、近年では IRPD が注目されるようになってきており、わが国でも、日本補綴歯科学会の会員の先生方を中心として、精力的に IRPD に関する基礎的・臨床的研究が行われています。今回、IRPD に関する論文情報を網羅的に検索し、IRPD の現状と問題点を整理いたしましたので、是非ご一読いただければ幸いです。

最後になりましたが、本総説論文に際して、多大なご指導を賜りました、長崎大学生命医科学域(歯学系)口腔インプラント学分野の澤瀬 隆教授、ならびに、本論文の作成に多大なご尽力をいただきました共著者の先生方に厚く御礼申し上げます。

令和5年度 奨励論文賞



東 孝太郎 (大阪大)

The relationship between changes in occlusal support and masticatory performance using 6-year longitudinal data from the SONIC study
J Dent 2023; 139: 104763.

この度は、令和5年度公益社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞に選出いただき、大変光栄に存じます。受賞に際して、査読や選考に携わったすべての方々に、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

咀嚼能力の低下は、咬合支持の喪失と関係しています。これまでに横断研究によってその関連が示されていますが、縦断的に検討を行った研究は存在しませんでした。本研究では地域在住高齢者を対象とした長期縦断コホート研究である SONIC study において臼歯部咬合支持の変化と咀嚼能率の変化の関連を検討しました。マルチレベル分析である線形混合モデルの結果、性別、咬合力、未補綴欠損歯数、経過時間、および咬合支持の変化は咀嚼能力と有意に関連していました。さらに、交互作用を検討した結果、咬合支持の喪失が経時的な咀嚼能力低下を促進する可能性を示しました。本研究は、咀嚼能力の低下と咬合支持の変化の関係を縦断的に検討した、これまでにない知見であり、歯科補綴学にとって貴重な成果であると考えております。今回の受賞を励みにし、今後はこれらの知見に関してより詳細な検討を行うことで、歯科補綴学の発展に貢献できる研究を続けたいと存じます。

最後になりましたが、本研究に際してご指導賜りました池邊一典教授をはじめ、多大なる御助言や御協力を賜りました諸先生方に厚く御礼申し上げます。



善本 佑 (新潟大)

Effect of mandibular bilateral distal extension denture design on masticatory performance
J Prosthodont Res 2023; 67(4): 539-547.

この度は、令和5年度日本補綴歯科学会奨励論文賞を拝受し、大変光栄に存じます。ご選考いただきま

した日本補綴歯科学会の諸先生方に心より感謝申し上げます。

超高齢社会において、適切な義歯の製作は、バランスのよい食生活を可能とすることから、健康寿命延伸に重要とされています。特に下顎両側遊離端欠損症例では、義歯の安定性が課題であり、その設計は重要な考慮事項であるといえます。そこで本研究は、下顎両側遊離端義歯を問題なく使用している患者53名を対象に、その設計が咀嚼能率(MP)に与える影響を検討しました。その結果、MPは機能歯数、咬合支持数、レスト数との間に正の相関を認め、上顎義歯の有無、大連結子の種類、間接支台装置の有無において有意な群間差を認めました。特にバータイプの大連結子や間接支台装置がある場合にMPは高く、相互作用において有意差は認めませんでした。また、ロジスティック回帰分析では、機能歯数と間接支台装置の有無が良好なMPと有意に関係しており、下顎両側遊離端義歯症例における間接支台装置の設置が、咀嚼能力向上に有利に働くことが示唆されました。今回の受賞を励みにし、これからも社会に貢献できるような研究に尽力してまいります。

最後になりましたが、本研究の遂行に際し、ご指導を賜りました小野高裕教授をはじめ、共著者の先生方、また、数多くの助言やご協力いただきました諸先生方にこの場をお借りして心より御礼申し上げます。



大川純平 (新潟大)

Developing tongue coating status assessment using image recognition with deep learning
J Prosthodont Res 2023; 68; 425-431.

この度は、令和5年度公益社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

本論文では、口腔衛生状態の指標となる舌苔の付着度について、人工知能(AI)を用いた評価手法を提示しています。舌苔は、誤嚥性肺炎の原因になりうる口腔内微生物の増加を招く可能性があり、口腔機能低下症の診断基準の一つとして視覚的に評価されています。しかしながら、視覚的評価においては、評価者間でのばらつきの可能性や詳細な評価が難しいことが考えられます。そこで本研究では、舌苔の付着度を簡便かつ詳細に評価するために、写真から舌の範囲を自動

検出する「舌検出 AI」と、舌苔の付着度を細分化して評価する「舌苔分類 AI」との二つの画像認識 AI を生成し、その精度を評価しました。精度検証の結果、舌の範囲は非常に高い精度で検出され、舌苔付着度は歯科医師による評価と高い一致度を認めました。本 AI 技術を応用し、「だれでも・どこでも・簡単に」評価を行うことで、口腔機能の維持に寄与できるよう、今回の受賞を励みとして研究を進めたいと思います。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたりご指導いただきました大阪歯科大学高齢者歯科学講座の小野高裕教授、本学包括歯科補綴学分野の堀一浩教授、ならびに研究にご協力していただきました方々に心から厚く御礼申し上げます。



浅見和哉 (明海大)

Assessment of awake bruxism
— Combinational analysis of
ecological momentary assessment
and electromyography —
J Prosthodont Res 2024; 68(1):
166–171.

この度は令和 5 年度公益社団法人日本補綴歯科学会優秀論文賞（奨励論文賞）を賜りましたことを大変光栄に存じます。

ブラキシズムは睡眠時と覚醒時に分類され、睡眠時ブラキシズムはポリソムノグラフィー検査におけるカットオフ値が提案され現在も広く利用されています。しかし、覚醒時ブラキシズムはポリソムノグラフィー検査を行えないことから日中のデータを集める困難さに加えて、会話や咀嚼といったファンクショナルな行動が多くみられるため筋電図検査単体ではエビデンスが不十分とされてきました。そのため、覚醒時ブラキシズムは検査方法、検査値の評価基準、診断、治療効果の評価など未だコンセンサスが得られていないことが数多くあります。そのような背景がある中で、本研究では近年報告されはじめたスマートフォンベースのアプリケーションを利用した生態学的瞬間評価を応用して、初めて筋電図検査と生態学的瞬間評価を組合せて覚醒時ブラキシズムを評価した報告を行いました。筋電図検査におけるカットオフ値を示したこの報告が今後のブラキシズムの研究・臨床において少しでも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、本研究の遂行に際し多大なるご指導ご鞭撻を賜りました明海大学歯学部の藤澤政紀

名誉教授、ならびにご協力いただいた諸先生方に厚く御礼申し上げます。この受賞を励みに更なる研鑽を積みたいと思います。



前嶋康平 (昭和大)

Effects of vibratory feedback stimuli
through an oral appliance on sleep
bruxism: A 14-week intervention
trial
J Dent Sci 2024; 19(3): 1714-1721.

この度は、令和 5 年度公益社団法人日本補綴歯科学会奨励論文賞に選出いただき、大変光栄に存じます。受賞に際し、査読や選考にご尽力いただいたすべての方々に、心より感謝申し上げます。

睡眠時ブラキシズム (SB) の管理方法として、日常臨床では一般的にオクルーザルスプリント (OS) 療法が用いられています。しかし、スプリントを装着するだけでは SB の抑制には至らず、多くの歯科医師がその対応に苦慮しています。そこで我々は、振動刺激を用いたバイオフィードバック療法に着目し、通常用いる OS 内に感圧フィルムを埋め込み、ひずみに応じて OS に振動刺激が加わる装置を開発しました。約 3 か月間の研究期間を通して、その長期的な SB 抑制効果の持続性を検証した結果、振動刺激は睡眠に影響を与えることなく、SB イベントの持続時間および回数を有意に減少させることが明らかになりました。

今後は、このシステムのさらなる開発を進め、広く普及させることで、SB に悩む患者や歯科医師の臨床に貢献し、国民の健康維持・増進、さらには QOL の向上に寄与できることを願っております。

最後に、本研究の遂行にあたり、多大なるご指導を賜りました馬場一美教授をはじめ、貴重な助言とご協力をいただいた諸先生方に深く感謝申し上げます。



JPR Best Paper Award 2023 (Review article category)



依田信裕 (東北大)

The accuracy of implant placement with computer-guided surgery in partially edentulous patients and possible influencing factors: A systematic review and meta-analysis

J Prosthodont Res 2022 Jan 11; 66(1): 29-39.

この度は、JPR Best Paper Awardにご選出いただき、大変光栄に存じます。受賞に際して、査読や選考に携わったすべての方々に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本論文は、部分歯列欠損に対するコンピュータガイドドットサージェリーを用いたインプラント埋入精度に関する臨床研究を対象としたシステマティックレビューです。インプラント埋入手術においては、例えばガイドドットサージェリーを用いたとしても、事前に計画した位置と実際の埋入位置との間に乖離が生じることがあり、これにはさまざまな要因が影響することがわかっています。本レビューにより、歯列の欠損形態、サージカルガイドプレートの使用タイミングと製造方法が、インプラント埋入精度に有意に影響することが新たに示されました。本レビューにより得られた知見は、ガイドドットサージェリーにおいてインプラント埋入位置にズレが生じるリスクが高い症例を術前に把握するための一助となり、より正確なインプラント埋入手術の実施に大きく貢献すると考えています。また、インプラント埋入手術においては、近年ダイナミックナビゲーションシステムの活用例が増加しており、今後はそれらを含めた検証が必要と考えています。

最後になりますが、本研究を主体的に遂行した Putra 博士 (アイルランガ大学 (インドネシア))、総括的にご指導賜りました佐々木啓一教授、ならびに本研究にご協力いただきました諸先生方に心より感謝申し上げます。



JPR Best Paper Award 2023 (Original article category)



Adolfo Di Fiore (Department of Neuroscience University of Padova)

Dear Members of Japan Prosthodontics Society,

I am honored to share my thoughts on being recognized for our research, “Comparison of the flexural and surface properties of milled, 3D-printed, and heat-polymerized PMMA resins for denture bases: An in vitro study.” This recognition validates the dedication of our team and encourages us to continue in this field. Receiving the JPR Best Paper Award for 2023 has been a significant milestone in my academic career. Not only has it validated the countless hours of hard work and dedication, but it has also served as an encouragement to continue pursuing innovative research in the field of dental materials. Being recognized by peers and experts in the field has boosted my confidence and motivated me to strive for excellence in future projects. Through this experience, I have learned the importance of interdisciplinary collaboration and meticulous experimentation. The comparative analysis of different PMMA resins produced by different techniques required a thorough understanding of materials science, microbiology, and dental technology. This project underscored the value of a holistic approach to research, where the integration of different expertise can lead to comprehensive and impactful results. Receiving the award for this research was a very rewarding experience. It has highlighted the importance of perseverance, collaboration and attention to detail in scientific research. I hope that our findings will contribute to the advancement of dental materials and inspire further research in this area.

Thank you again for this recognition. I look

forward to continuing our work and exploring new ways to improve the quality of dental care through innovative research.



第 133 回学術大会 課題口演賞



AHMED SAMEIR MOHAMED ALI (Tokyo Medical and Dental University)

Nasal function in maxillectomy patients using different obturator designs, a computational fluid dynamics (CFD) study

Dear Members of the Japan Prosthodontics Society,

I would like to begin by thanking Almighty God for His blessings. I would also like to express my deep gratitude to my parents and my wife for their unwavering support and encouragement throughout this journey.

In this research, we aimed to investigate nasal function in patients who have undergone maxillectomy surgery. These patients often experience nasal symptoms that tend to be overshadowed by other complications and receive less attention from dental practitioners. We sought to better understand nasal function in these patients and raise awareness among maxillofacial prosthodontists about these issues. I am deeply grateful to the Japan Prosthodontics Society for providing me with the incredible opportunity to participate in the oral presentation competition.

My heartfelt thanks go to Professor Noriyuki Wakabayashi, the head of our department and research group, for giving me the opportunity to join TMDU as a PhD student and for his kind supervision and instructions.

I am especially grateful to Professor Yuka Sumita, whose belief, supervision, and support have been instrumental in bringing this research to fruition. Her patience in nurturing students' research ideas until they fully develop is

something I deeply appreciate.

I would also like to express my gratitude to Hattori Mariko Sensei, a remarkable teacher with a diverse range of academic skills. Her efforts in creating a challenging yet productive academic environment, as well as her outstanding research supervision, clinical advice and training, have been invaluable to my growth.

In addition, I would like to thank MEXT and TMDU for providing chances and scholarships to students from Sudan, which is a tremendous help to my country.

Lastly, I extend my sincere thanks to the teachers and colleagues of the Advanced Prosthodontics Department and Maxillofacial Prosthodontics Clinics. I am particularly grateful to Dr. Islam Ali for his continuous support and loyal friendship.

Thank you once again for this wonderful experience.



柴田翔吾 (鶴見大)

3D プリントと従来法による全部床義歯の咀嚼能力評価：クロスオーバー臨床研究

この度は、日本補綴歯科学会第 133 回学術大会におきまして、課題口演賞に選出していただき大変光栄に存じます。また、ご選考いただきました先生方、学会の皆様方に改めて御礼申し上げます。

今回発表させていただきました「3D プリントと従来法による全部床義歯の咀嚼能力評価：クロスオーバー臨床研究」は特定臨床研究として東京医科歯科大学と本学との共同研究にて実施されました。汎用性や生産効率の点で 3D プリンターは有用であることから全部床義歯の製作に応用されています。本実験を通し、3D プリンテッド義歯においても従来義歯と同様の義歯調整方法により同等の咀嚼能力を獲得でき、長期使用においても安定した咀嚼能力を維持できる可能性が示されました。

末筆となりますが、前川教授には座長の労をねぎらっていただき、木本教授、鮎川教授ならびに松浦教授には貴重なご意見をいただくことができました。本発表に関し多大なるお力添えをいただきました。大久

保力廣教授や金澤 学教授をはじめ、本研究に係るすべての先生方ならびに関係者、さらに本実験に参加してくださいました患者様の皆様方にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。今後とも研究を重ね、より多くの発見とご報告をさせていただきたく存じます。3D プリンテッド義歯のさらなる発展を祈願し、簡単にはなりますが受賞者の声とさせていただきます。



坂本和基 (岡山大)

高齢外来患者における欠損補綴治療法と食品摂取の多様性および栄養摂取との関連

この度は、日本補綴歯科学会第133回学術大会におきまして、課題口演賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

食品摂取の多様性は、高齢者の栄養状態や身体・認知機能の維持に重要ですが、欠損補綴治療の差違との関連を検討した研究はありません。そこで本研究では、過去に可撤性床義歯 (RD) またはインプラント支持型補綴装置 (ID) の治療を受けた高齢者を対象に、治療法別に食品摂取の多様性および栄養摂取状況に違いがあるか、また、今後の縦断研究を見据え、食品摂取の多様性に関連する因子を同定することを目的としました。

その結果、食品摂取の多様性、体組成、栄養素の摂取量においては、ID 群、RD 群で有意差があるとは言えませんでした。

また、年齢が低いこと、循環器疾患を有することが、食品摂取の多様性が低いことに有意に関連する可能性が示唆されました。

今後は、欠損様式別などのサブ解析を行うとともに適切なデザインの縦断研究が必要と考えます。

最後に、本研究の遂行にあたりご指導を賜りました、本学大学院医歯薬学総合研究科インプラント再生補綴学分野の窪木拓男教授、岡山大学病院新医療研究開発センターの大野 彩講師をはじめ、数多くの御助言、御協力をいただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。



中村友紀 (福歯大)

前歯 CAD/CAM 冠トラブル発生状況とその原因の分析

この度は、日本補綴歯科学会第133回学術大会におきまして、課題口演賞に選出していただき、大変光栄に存じます。ご選考くださいました諸先生方に心より感謝申し上げます。

近年、CAD/CAM 技術の発展、審美的要求に伴い保険診療ではハイブリッドレジンブロックを用いた CAD/CAM レジン冠が臨床で普及しています。小白歯および大白歯 CAD/CAM レジン冠 (CRC) の臨床的トラブルは早期に脱離しやすいことが報告されていますが、前歯 CRC の臨床的トラブル発生を調べた報告はみあたりません。本研究では、前歯 CRC の後ろ向き研究を行い、累積生存率と累積成功率を明らかにすること、さらに、前歯 CRC の予後のみではなく、支台歯形態の三次元デジタルデータを応用してトラブル発生に関連するリスク因子を検討しました。その結果、CRC は高い生存率を示しましたが、頬舌側テーパーを 20 度以上にすると成功率に影響し、残存歯数や装着部位よりも、支台歯の頬舌側テーパーが大きくなるとトラブル要因になることが示唆されました。

今後は、前向き研究や基礎研究からさらなる解明を目指し、補綴歯科治療の発展に微力ながらも貢献できるよう尽くしてまいりたいと思います。

最後に、本研究の遂行にあたり、ご指導を賜りました福岡歯科大学咬合修復学講座冠橋義歯学分野の松浦尚志教授、高江洲 雄先生、本研究にご助言を賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。



Quang Van Nguyen (新潟大)

Controlling Redox State at Transplantation Site Enhances Bone Regeneration

It was a profound honor for me to be selected for the Oral Presentation Award at the 133rd Annual Meeting of the Japanese Prosthodontics Society.

My research addresses a critical challenge of bone augmentation procedure. In cell-based bone augmentation, excessive generation of reactive oxygen species (ROS) at the surgical site leads

to local oxidative stress. This stress can result in the loss and dysfunction of transplanted cells, ultimately hindering bone regeneration. Hence, moderating ROS levels with an antioxidant could preserve the survival and function of transplanted cells, thereby supporting bone regeneration. Edaravone (EDA), a potent free radical scavenger, has gained significant attention for its ability to protect various cell types from oxidative damage. Our study focused on controlling oxidative stress at the transplantation site to promote bone regeneration using EDA. Our findings revealed that administering EDA at the transplantation site effectively reduced oxidative stress, improved the local microenvironment, enhanced the survival and differentiation of transplanted cells into bone-forming cells, and ultimately promoting bone formation. This study represents a promising step toward developing a more predictable bone augmentation method using EDA.

This award is a significant milestone in my academic journey and reflects the collaborative effort behind this research. I extend my deepest gratitude to my supervisors, Professor Uoshima Katsumi and Dr. Akiba Yosuke, as well as the faculty and students of the Division of Bio-Prosthodontics at Niigata University, for their invaluable guidance and support.



岩本佑耶 (新潟大)

アグマチンはマウスの咬筋部の持続性炎症が誘発する不安行動を軽減する

この度は、日本補綴歯科学会第133回学術大会におきまして、課題口演賞にご選出いただき大変光栄に存じます。

慢性痛は単に感覚的な痛みだけではなく、不快な情動を引き起こし私たちの生活の質を低下させる重大な要因となっています。そのため、慢性痛の制御には多角的なアプローチが重要となっています。薬剤による治療には、副作用の問題やその効果には限界があるため、近年では食習慣の改善により慢性痛を制御するという報告がされています。酒粕含有成分“アグマチン”は、不安やうつなどの不快な情動を抑制する効果があ

るとい報告がありますが、顎関節症をはじめとする顎顔面部の慢性痛に関連した不快な情動の抑制効果についての報告はありません。本研究では、Complete Freund's Adjuvant (CFA) を用いた咬筋痛モデルマウスを用いて、アグマチンの不安抑制効果を行動実験とその基盤となる脳神経機構を免疫組織化学で評価しました。本研究によってアグマチンは脳の前帯状皮質や島皮質、吻側延髄腹内側部の神経興奮とエピソード的な変化を抑制したことで、咬筋痛モデルマウスの不安行動を有意に低下させることが示唆されました。今後は、酒粕由来アグマチンサプリメントの開発を目指して、日々研鑽に精進してまいります。

最後になりますが、本研究をご指導いただきました共同演者の先生方、および口腔生理学分野の岡本圭一郎先生、歯科薬理学分野の柿原嘉人先生への謝辞とさせていただきます。



第133回学術大会 課題口演優秀賞



岡田佳恵 (大阪大)

全部床義歯の三次元情報を用いた顎堤条件と咀嚼能率の関連—機械学習モデル解析—

この度は、日本補綴歯科学会第133回学術大会におきまして、課題口演優秀賞に選出していただき大変光栄に存じます。また、ご選考いただきました先生方、学会の皆様方に改めて御礼申し上げます。

無歯顎者の機能回復に用いられる全部床義歯治療において、良好な治療結果を得るためには、顎堤の形態や対向関係、粘膜性状、唾液量など、さまざまな生体要素を検討する必要があると考えられます。

本研究では、全部床義歯の三次元情報を用いることで、顎堤形態や上下顎の顎堤の位置関係を定量的に評価し、顎堤の各条件と咀嚼能率との関連を検討しました。非線形関係を評価できる機械学習モデルであるランダムフォレストを用いて分析を行った結果、咀嚼能率低値に対して、上顎顎堤高さが最も強く関連しており、また、5 mm 未満で最も高く影響していたことが示されました。これは、本学会の術前診査表の分類基準値とほぼ一致する結果であり、大変興味深く感じました。今回の受賞を励みにし、今後は義歯の要素など、

別の視点からも検討を行うことで、補綴歯科治療の進展に貢献できる研究を続けていきたいと考えております。

最後になりましたが、本研究に際して多大なるご指導を賜りました池邊一典教授ならびに研究遂行にあたり数多くの助言やご協力をいただきました諸先生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



阿部真澄 (東北大)

高齢者の口腔・認知の両機能を向上させる訓練方法：二重盲検 RCT による効果検証

この度は日本補綴歯科学会第 133 回学術大会におきまして、課題口演優秀賞に選出していただき、大変光栄に存じます。

口腔機能低下症やオーラルフレイルが社会問題化する中で、口腔機能の低下が認知機能の低下と関連することが報告されています。これまで、口腔機能を向上させるために、さまざまなトレーニング方法が行われていますが、これらのトレーニングと認知機能の維持・向上への効果は不明な点が多いのが現状です。本研究では、認知トレーニング（脳トレ）と口腔機能トレーニングを組み合わせた認知・口腔機能トレーニングを開発し、トレーニングアプリとしてタブレットに搭載し、健常高齢者 58 名を対象とした 6 週間の生活介入を二重盲検 RCT にて行いました。

認知機能においては認知・口腔トレーニング群と口腔機能トレーニング群は異なる認知ドメインに効果を示し、両トレーニング群でオーラルディアドコキネシスのスコアの改善を認めました。今後は、トレーニングアプリの改良を行い製品化に向けてさらなる検証を進めていきたいと思っています。

最後に本研究の遂行にあたりご指導を賜りました、人間環境大学総合心理学部 野内 類先生、本学先端フリーラジカル制御学講座 佐々木啓一先生、分子・再生歯科補綴学分野 江草 宏先生、本学大学院口腔システム補綴学分野 依田信裕先生、小川 徹先生、白石 成先生、日原大貴先生をはじめ、多大なるご助言やご協力をいただきました同医局の先生方に厚く御礼申し上げます。



DANG Tuan Anh (岡山大学)

BMP-2 は MRONJ 様モデルマウスの骨細胞ネットワークを回復させる BMP-2 restores osteocyte networks in a MRONJ-like mouse model

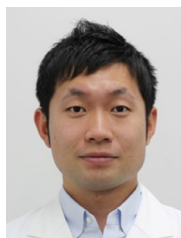
I am extremely privileged and humbled to have received the prestigious Best Presenter Award for our research on the Biological category at the 133rd Annual Meeting of the Japanese Society of Prosthodontics. The subject matter forms the core of my PhD thesis, on which I have served as the First Author after dedicating over 4 years to research in Japan.

Our research team has recently established that Bone Morphogenetic Protein-2 (BMP-2), a pivotal bone growth factor in the TGF- β group, holds significant potential for bone defect regeneration. This study further illustrates BMP-2's remarkable ability to support the recovery of the degenerated mature osteocyte network in the Medication-Related Osteonecrosis of the jaw-like mouse model.

I would like to express my sincere appreciation to my esteemed supervisor, Professor Takuo Kuboki, and my mentor, Associate Professor Mitsuaki Ono. Their invaluable insights and unwavering support have been crucial in shaping the direction of my research. Besides, I would like to extend my heartfelt appreciation to all the professors and teachers at the Department of Oral Rehabilitation and Regenerative Medicine and the Department of Molecular Biology and Biochemistry, at Okayama University. I am truly grateful to my teachers and colleagues for their commitment, continuous encouragement, and support throughout the project implementation.

Last but not least, this award serves as a tremendous source of inspiration for me and other emerging researchers. It reinforces our determination to push our boundaries and make significant contributions to the advancement of the field of Prosthodontics as well as Dentistry in the future.

第 133 回学術大会 デンツプライシロナ賞



柿沼祐亮 (東北大)

形状記憶性 3D プリント材料の開発
および顎顔面補綴装置への応用に向
けた検討

この度は、日本補綴歯科学会第
133 回学術大会におかれまして、優
秀ポスター賞にご選出下さり、大変光栄に存じます。

顎顔面補綴装置は、適用部位の経時変化が及ぼす適
合低下により、定期的な調整が必要となります。さら
に、大型の補綴装置の場合、調整・再製には熟練度を
要します。本研究は、温度依存的に形状記憶回復性を
示す形状記憶ゲル技術 (SMG) に着目し、3D プリン
ティング材料への応用と口腔内使用を想定した物性評
価、そして、中空型栓塞子モデルの作製を行いました。
SMG は、材料の結晶転移温度を制御することで、温
熱下で自由に変形させることができ、かつ、冷却によ
り形状を固定、その形状を口腔内温度で保持すること
が可能です。本技術により、口腔内の粘膜変化に追従
させるために、補綴装置の表面形状を自由に変化させ
ることができます。さらに、3D プリンティング材料
へ適応することで、軽量でシームレスな顎顔面補綴装
置の作製が可能となります。本受賞を励みとして、実
用化を見据えた臨床評価を進めていくとともに、周術
期・リハビリテーション医療領域への展開、新規顎顔
面補綴治療の基盤構築へとつなげたいと思います。

末筆ですが、本研究の遂行にあたり多くのご指導を
賜りました東北大学病院 小山重人准教授、山形大学
工学部 古川英光教授、東北大学大学院歯学研究科 江
草宏教授、依田信裕教授、ならびに多大なるご協力を
賜りました方々にこの場を借りて心より感謝申し上げ
ます。



岩崎太郎 (日本大)

バイオアクティブモノマー含有新規
装着材料の歯質接着性および石灰化
誘導能

この度は、日本補綴歯科学会第
133 回学術大会におきまして優秀ポ
スター賞 (デンツプライシロナ賞) を頂戴し、誠に光
栄に存じます。

近年の技術発展とともに、高い機能を伴うさまざま
な歯科材料の研究が行われています。その一つとし
て、歯質の再石灰化や象牙質再生などを誘導する新規
バイオアクティブモノマー (calcium salt of 4-meth
acryloxyethyl trimellitate acid, 以下 CMET) が挙げ
られ、本モノマーを含む多機能な歯科材料の研究開発
が進められています。一方で、CMET を含む装着材料
に関する研究は少ないのが現状です。そこで本研究で
は、CMET 含有の新規装着材料を試作し、歯質に対す
る接着強さや石灰化物誘導能について市販装着材料と
比較し評価を行いました。その結果、CMET 含有の新
規装着材料は市販のレジ系装着材料と比較し同等も
しくは有意に高い接着強さを有することが示されまし
た。さらに、CMET を含有する新規装着材料は石灰化
物を誘導することが示唆されました。

最後になりましたが、本研究の遂行にあたり多大な
ご指導、ご尽力を賜りました日本大学歯学部歯科補
綴学第Ⅲ講座の小峰 太教授、窪地 慶助教、高田宏起助
教、並びに多大なるご協力を賜りました講座員の諸先
生方にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



津野美香 (医歯大)

実験モード解析を応用した荷重時の
インプラントオーバーデンチャーに
おける設計間比較

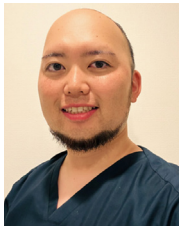
この度は日本補綴歯科学会第 133
回学術大会において、デンツプライ
シロナ賞に選出していただき大変光栄に存じます。

下顎のインプラントオーバーデンチャー (IOD) 設
計に関して、前歯部 2 本埋入が定石とされており、
力学的研究において複数報告されています。しかし、
インプラント治療の普及に伴い、口腔内に既存のイン
プラントがみられる高齢者は稀有なことではなくなり
ました。臼歯部に埋入されている既存のインプラント
を IOD に再利用する設計の有用性について構造学的

に比較検討された報告がなかったため、本研究では、実験モード解析を応用し、粘膜厚さの違う下顎模型上で作製したIODの前歯部および臼歯部に垂直的・水平的荷重（咬合力・側方力を想定）が加わった際の、アバットメント位置（インプラント埋入位置）の違いによるIODの最大変位量を比較検討しました。

その結果、顎粘膜が厚い場合は、前歯支持設計のIODにおいて荷重時の変位量が少ない傾向にあると考えられ、一方で、顎粘膜が薄い場合は、小白歯・大白歯支持設計のIOD適応の可能性も示唆されました。今後は、さらなる検討を重ねていき、IODの設計を考える際の一助として臨床応用できるような研究に励んでいきたい所存です。

最後に本研究の遂行に際し、ご指導賜りました東京医科歯科大学口腔再生再建学分野 丸川恵理子教授、中田秀美助教、神奈川歯科大学口腔再生インプラント学 黒田真司教授ならびに数多くの助言をいただいた医局員の先生方に厚くお礼申し上げます。



佐藤太朗（昭和大）

睡眠時ブラキシズム患者由来 iPS 細胞における発現変動遺伝子の探索

この度は、日本補綴歯科学会第133回学術大会におきまして優秀ポスター賞（デンツプライシロナ賞）に選出いただき、大変光栄に存じます。

睡眠時ブラキシズム（SB）は補綴歯科領域において治療予後を左右する重要なリスクファクターとして知られていますが、その神経生理学的な発症機序の詳細は依然として不明です。我々は先行研究において、SB患者から樹立したiPS細胞由来の神経細胞において、コントロールと比較し電気生理学的に高い興奮性を示すことを報告しましたが、この表現型を生じる要因や責任細胞分画の同定には至りませんでした。本研究では、SB患者に特異的な遺伝子発現パターンと、神経細胞の活動性との関連の解明を目的とし、SB患者由来の神経細胞に対しバルクおよびシングル核RNAシーケンス解析を行いました。その結果、SB群ではカルシウムシグナリングに関連する発現変動遺伝子を認め、さらにシングル核RNAシーケンス解析により、グルタミン酸作動性神経でNMDA受容体遺伝子（*GRIN2B*）およびアセチルコリン受容体遺伝子（*CHRM3*）の発現が上昇していることが明らかになりました。これらの遺伝子発現変動は神経細胞の過剰

な興奮性上昇に寄与する可能性があります。今後、これらの遺伝子とSBの関連をより詳細に調査し、発症メカニズム解明に貢献する研究を進めてまいりたいと考えております。

最後に本研究を進めるにあたり、ご指導を賜りました馬場一美教授、順天堂大学の赤松和土教授、そして貴重なご意見と多大なるご協力を賜りました諸先生方に、深く感謝申し上げます。



近藤 威（東北大）

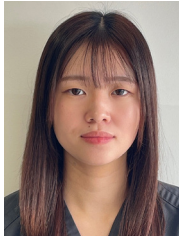
硬組織形成不全の発症機序解明に向けた試験管内ヒトiPS細胞由来硬組織構造体の作製

この度は、日本補綴歯科学会第133回学術大会におきまして、優秀ポスター賞（デンツプライシロナ賞）を賜り、大変光栄に感じております。また、選考いただきました先生方には心より感謝申し上げます。

患者の体細胞から作製可能な人工多能性幹細胞（iPS細胞）は多能性を有し、さまざまな組織に分化します。そのため、患者の遺伝的特性を示す細胞の分化過程を試験管内で再現できる可能性があり、これまで難治性疾患の原因究明や創薬に貢献してきました。低フォスファターゼ症患者は骨形成不全に加え、象牙質やセメント質の形成不全による歯の形態異常を伴います。しかしながら、ヒトiPS細胞から歯の三次元構造体を作製する方法は確立しておらず、硬組織形成不全の発症機序解明は難航していました。

本研究では、健常者由来iPS細胞を硬組織分化誘導培地中で振盪培養することで、骨、象牙質、セメント質の形成に関連する分子の高い発現を示した三次元硬組織構造体を作製することに成功しました。一方、低フォスファターゼ症患者由来iPS細胞を用いて作製した三次元構造体は、健常者と比較して骨、象牙質、セメント質の形成に関連する分子の低い発現を示しました。このことから、低フォスファターゼ症の特性を反映したiPS細胞由来三次元硬組織構造体を作製できたことが示唆されます。今後は本研究成果を基に硬組織形成不全の病態解明や創薬に尽力したいと考えております。

末筆ですが、本研究を遂行するにあたり、多くのご指導を賜りました東北大学の江草 宏教授をはじめ、ご協力いただきました先生方には心から感謝しております。この場を借りて厚く御礼申し上げます。



木之村史織 (東北大)

拡散テンソル画像を応用した内・外側翼突筋筋線維走行の三次元解析

この度は、日本補綴歯科学会第 133 回学術大会におきましてデンツプライシロナ賞に選出していただき大変光栄に存じます。

顎口腔系のさまざまな機能運動は、咀嚼筋などの顎筋群の協調活動により遂行されています。さらに各咀嚼筋は多羽状構造からなり、その内部も機能的に分化しており、複雑精緻な機能運動の遂行に寄与しています。それら咀嚼筋活動の解析には筋電図が有用であり、また筋機能に対応する筋の形態学的特徴の把握には MRI 解析が適しています。しかし通常の MRI では複雑な咀嚼筋内部の分画、特に分画内の筋線維の配向構造の把握は難しく、そのため咀嚼筋内部の機能分化を筋線維構造に関連付けて理解することは困難でした。

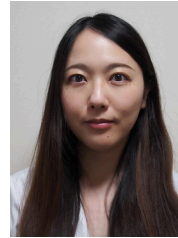
そこで我々は MRI の撮像方法の一つである拡散テンソル画像に着目し、内・外側翼突筋の筋線維描出を行い、下顎安静位と開口時の筋線維走行を比較し、どのように変化しているか調査することを目的とし、実験を行いました。

解析の結果、両筋において各被験者の筋線維描出の最適条件が明らかとなり、外側翼突筋では筋線維配向性が被験者ごとに大きく異なる結果となりました。今後はさらに詳細に筋を分画解析し、個々の顎顔面形態や顎運動の違いも併せて検討する必要があると考えております。

最後に、本研究の遂行にあたりご指導賜りました本学口腔システム補綴学分野の依田信裕教授をはじめ、ご指導いただきました先生方にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。



第 133 回学術大会 カボデンタル賞



岸本奈月 (新潟大)

CAD を用いた排列シミュレーションが全部床義歯製作実習の技能教育に与える効果

この度は、日本補綴歯科学会第 133 回学術大会におきまして、優秀ポスター賞 (カボデンタル賞) に選出していただき、大変光栄に存じます。

全部床義歯の人工歯排列では、人工歯の位置や咬合様式などを三次元的に把握することが求められますが、歯学生がその要点を十分に理解することは容易ではありません。CAD は、従来の二次元的な実習書では表現し難い三次元的な視覚教材としてのポテンシャルを持っていると考えます。

本研究において、学生は従来の全部床義歯製作実習に加え、CAD を用いた義歯設計の全作業工程を経験しました。主観的評価により、CAD 技術を全部床義歯技能実習に取り入れることで、人工歯排列の理解や意識がより深まることが明らかになりました。また CAD 実習は臼歯部排列前よりも排列中に行うことで、臼歯部排列や咬合様式に関する主観的難易度が低くなることが示唆されました。

現在は上記 CAD 実習に加え、学生に 3D データを共有し、実習時間外でも自由にアクセスできる仕組みを取り入れた実習体系を構築しています。日々進歩していく技術を柔軟に取り入れることで、歯学部における補綴歯科学教育の一助となれるよう邁進してまいり所存です。

最後になりますが、本発表にあたり多大なご指導を賜りました新潟大学大学院医歯学総合研究科包括歯科補綴学分野 堀 一浩教授、村上和裕助教に深く感謝申し上げますとともに、本実習を遂行するにあたりご助言・ご協力いただきました先生方に、心より御礼申し上げます。



**西 恭宏（鹿児島大）**

両側上顎骨全摘出の顎補綴症例
— 23年間の経過報告 —

今回の症例報告に一定の評価をいただきましたことに謝意をお伝えいたします。

腫瘍により上顎両側を大きく切除する症例に、顎義歯をどう支持してどう維持するか予想がつきにくい状況で着手しましたが、術後1週間後にコイルスプリング支持による上顎顎補綴装置を装着することができ、なおかつオブチュレーター形態の模索・修正を1年経て口唇・頬の筋圧によって維持される顎義歯を装着し、この後20年以上の経過と対応内容について報告しました。腫瘍切除前から接した患者さんでしたが、術後早期顎義歯装着とその後の最終的な顎義歯装着してからも、ほぼ毎月来院していただき、23年の通院

を継続されていることにも敬意を表します。その間の経過観察において、変化への対応と顎義歯再製作5回を行ってきましたが、分割式オブチュレーター接合に使った磁性アタッチメントの維持力が維持されるものと消失するものがあったことや上口唇のエピテーゼ製作において色調再現と維持のための接着剤使用の難しさを経験し、骨支持のない上唇は収縮により口裂と鼻孔が繋がってしまうこともわかりました。しかし、顎義歯の再製においては、使用義歯による咬座印象がかなり有効でした。

患者は83歳となり今後も経過観察していきますが、上唇を支持する骨を切除する場合は、長期的な上唇収縮に対応する再建方法が検討される必要があると考えています。

最後に顎義歯やエピテーゼの製作に協力いただいた当院歯科技工士の方々に感謝いたします。

Prosthodontic Meeting for Next Generation 2024 開催報告

Prosthodontic Meeting for Next Generation 2024 が、3月29日(金)、30日(土)の2日間にわたり、神奈川県熱海市のKKRホテル熱海にて開催されました。この研修会は、若手会員育成のための研究に特化した会であり、学会としては2回目、対面形式での現地開催となりました。今回は「日本補綴歯科学会に若手歯科医師・歯科衛生士・歯科技工士が求めるもの:ニーズと期待の探求」をテーマとし、理事8名、参加者62名(歯科医師50名、歯科衛生士7名、歯科技工士5名)、特命委員5名の参加をいただきました。

特別講演1では、研究部門として吉田靖弘先生(北海道大学)が「研究費獲得に向けた戦略や工夫等」についてご講演されました。特別講演2では症例部門として窪木拓男先生(岡山大学)、二川浩樹先生(広島大学)、大久保力廣先生(鶴見大学)が「失敗から学ぶ」をテーマに講演を行いました。特別講演3では衛生士/技工士部門として加藤秀夫先生が「いつ食べる

何を食べるか 食を知る」というタイトルでご講演されました。口演発表では8題の発表があり、活発な質疑応答が交わされました。

また、グループ討論・発表会では、「今後の日本補綴歯科学会のあり方について」をテーマに、学会の問題点と対策について議論が行われました。9班(各5名程度)に分かれたワールドカフェ形式で討論が進められ、特に歯科衛生士グループでは、歯科衛生士の立場から補綴学会の問題点や対策について具体的な提案がなされました。

さらに、アイスブレイクや情報交換会を通じて、他大学の先生方と打ち解け合い、研究や補綴学会のあり方について積極的な意見交換が行われました。事後アンケートの結果からも、参加者にとって有意義な会であったことがうかがえました。

(特命委員会Ⅱ若手育成 小川 匠)



参加者とスタッフ



特別講演



グループ討論・発表

第133回学術大会におけるJSPENとの調印式

2024年7月6日(土)に、日本栄養治療学会(JSPEN)との連携協定に関する調印式が第133回学術大会の会場である千葉市幕張メッセで執り行われました。連携協定について下記の3つが確認されました。

1. 学術交流の活性化：学術大会におけるシンポジウムや研究・教育・臨床セミナー等を共催し、学問領域間や学会間の相互理解、および双方の会員の知識の幅の拡大を図る。
2. 共同臨床研究の推進：大学等研究機関から日常臨床の現場に至るまで幅広いフィールドから質の高い臨床情報を系統だって収集し、それらの情報を基に臨床エビデンスを構築し広く公表する。
3. 臨床栄養・口腔機能に関する研鑽：臨床栄養や口腔機能に関する既存の教育事業の共有により、臨床

栄養・口腔機能に関する知識の向上を図り、臨床栄養と歯科医療を通じた国民の健康増進に貢献する。

また、日本栄養治療学会の鍋谷圭宏副理事長と本学会の窪木理事長より連携協定の意義と経緯、協定の内容が報告され、さらに両学会がこの連携に期待するメリットについても述べられました。

協定書への調印後、両名による固い握手が交わされ、今後の発展を祈念して終了しました。

2025年2月14～15日にはパシフィコ横浜で第40回日本栄養治療学会学術集会在開催されます。今度は日本補綴歯科学会が日本栄養治療学会の場で、補綴のプレゼンスを示す重要な機会となると思います。会員の皆様には奮ってご参加くださいますようお願いいたします。
(学会連携委員会 近藤尚知)



協定書に調印する窪木理事長（左）と鍋谷副理事長（右）



調印後握手する窪木理事長（左）と鍋谷副理事長（右）

補綴関連講座・分野新教授紹介

**西村正宏**

大阪大学
大学院歯学研究科クラウンブリッジ補綴学・顎口腔機能学講座

2024年4月1日

この度、歴史ある通称「阪大1補綴」の教授を拝命しました西村正宏です。本紙面をお借りして、学会会員の皆様にご挨拶申し上げます。私は前任地の鹿児島大学の口腔顎顔面補綴学分野に教授として2013年3月1日に長崎大学の歯科補綴学分野（村田比呂司教授主宰）から異動しましたが、それから鹿児島で11年1か月、歯科補綴学、口腔インプラント学の教育臨床、そして研究では骨再生医療のトランスレーショナルリサーチに打ち込んで参りました。

この度の大阪大学は、出身校である九州歯科大学、博士（歯学）を頂いた広島大学を合わせると5つ目の大学となります。現在の講座は人数が減ったとはいえ、常勤の医局員が約40名近く、非常勤の先生方を合わせると80名近い先生が所属する大所帯です。教育領域ではいわゆるクラウンブリッジ補綴系を担っており、研究面ではインプラント、審美・CAD/CAM材料、接着、顎機能、組織再生工学の5つの系があります。組織再生工学系は2013年度末まで江草宏先生（現在は東北大学教授）によって牽引されましたが、今後は私が引き継ぐ形で、歯科補綴やインプラント治療が困難な患者さんを助けるための顎骨再生のトランスレーショナルリサーチによって、本学会や世界の歯科医療の発展に貢献していく所存です。補綴歯科学会の諸先生方におかれましては、引き続きご指導を賜わりたくお願い申し上げます。

**星 憲幸**

神奈川歯科大学
口腔デジタルサイエンス学
2024年4月1日

本年度より、神奈川歯科大学に新設されました口腔デジタルサイエンス学分野の教授を拝命いたしました星 憲幸です。前回は2021年に教育企画部の教授としてご挨拶させていただいておりますが、新たな講座の教授となりましたので、本紙面をお借りしまして日本補綴歯科学会会員の皆様にご挨拶させていただくこととなりました。心より感謝申し上げます。

私は、2001年に神奈川歯科大学顎口腔機能修復科学講座補綴学分野（豊田 實教授）に助手として入局し、その後は、2008年よりクラウンブリッジ補綴学分野（木本克彦教授）の設立と共に、臨床・研究・教育のお手伝いを行わせていただきました。現在は、口腔デジタルサイエンス学分野の教授として、また日本補綴歯科学会では広報委員会の副委員長として業務にあたらせていただいております。

口腔デジタルサイエンス学分野として、新たなデジタル技術を用いた歯科医療について学部生の教育と大学院生の指導、病院ではその臨床応用を取り入れ診療に当たらせていただくと共に若手育成と専門医育成に努めております。研究面としては、デジタル技術を用いた新技術の開発、新規歯科材料の開発、光触媒の歯科応用、補綴治療と唾液の関連性を中心として口腔内の各種症状や認知機能等全身への影響の研究を引き続き行っており、歯科補綴学並びに社会への還元にも努めてまいります。

今後は、神奈川歯科大学並びに日本補綴歯科学会の益々の発展のために、粉骨砕身の覚悟で臨む所存です。皆様方へのお礼と共に今後ともご指導を頂戴したいと存じますので、宜しくお願い致します。





黒嶋伸一郎

北海道大学
大学院歯学研究院口腔機能学
分野冠橋義歯補綴学教室
2024年4月1日

このたび、2024年4月1日付けで北海道大学大学院歯学研究院口腔機能学分野冠橋

義歯補綴学教室の教授を拜命しました黒嶋伸一郎と申します。山口泰彦前主任教授を引き継ぎ、冠橋義歯補綴学を担当するとともに、新たに口腔インプラント学も担当致します。今回、本紙面をお借りして、日本補綴歯科学会会員の皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

私は2002年に北海道大学歯学部歯学科を卒業後、口腔健康科学講座高齢者歯科学教室に所属して井上農夫前教授と野谷健治元准教授のご指導のもとで学位を取得致しました。その後は同教室に在籍し、研究・臨床・教育の研鑽を積んでおりました。2012年からは長崎大学生命医科学域（歯学系）口腔インプラント学分野に所属し、澤瀬 隆教授のご指導を受けながら、冠橋義歯補綴学と口腔インプラント学の研究・臨床・教育の研鑽を積んでまいりました。特に、歯工産学連携によるデンタルインプラントの開発研究や異分野融合による薬剤関連顎骨壊死の基礎的・臨床的研究に深く関与することができました。一方、日本補綴歯科学会では、これまでに、教育問題検討委員会幹事、渉外委員会委員・幹事、学術委員会幹事、ならびに九州支部幹事を経験させていただいておりますが、今後はさらに貢献ができますよう尽力する所存です。

浅学非才の身ではございますが、北海道大学大学院歯学研究院および日本補綴歯科学会の益々の発展に少しでも貢献できるよう、一層精進いたします。今後とも皆様からのご指導・ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



坂口 究

北海道大学
大学院歯学研究院口腔機能学
分野口腔機能補綴学教室
2024年4月1日

このたび、北海道大学大学院歯学研究院口腔機能学分野口腔機能補綴学教室の教授を

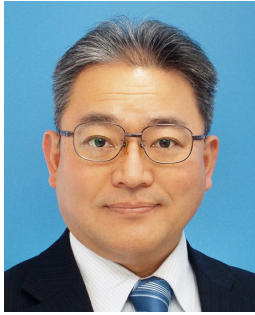
拜命いたしました坂口 究と申します。本誌面をお借りして、日本補綴歯科学会会員の皆様に謹んでご挨拶を申し上げます。

私は1995年に北海道大学歯学部を卒業し、川崎貴生教授、横山敦郎教授の薫陶を受けて、研究・臨床・教育の研鑽を積ませていただいております。研究は、大学院時代から現在に至るまで一貫して、歯科補綴学領域の中でも、歯科補綴の本流と言われる口腔機能、とくに「咬合、咀嚼」の領域に携わって参りました。口腔の健康管理を通じた全身の健康管理へのアプローチ法を確立し、もって国民の健康福祉の向上、つまり補綴歯科治療が真に健康寿命延伸への貢献を担うことを常に目指し、日々取り組んでおります。

本会においては、これまでに Journal of Prosthodontic Research 編集委員会幹事、日補綴会誌編集委員会幹事、規程検討委員会幹事、専門医認定委員会幹事、総務幹事（2期）、財務委員会委員、財務委員会幹事を14年間にわたって歴任させていただき、現在は規程検討委員会委員を拜命しております。今後は、これまでに経験させていただきましたことを活かし、本会のお役に立てるよう尽力して参ります。

浅学非才の身ではございますが、本学ならびに本会の益々の発展に少しでも貢献できるよう邁進して参ります。今後とも皆様からのご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。





伊藤誠康

日本大学
松戸歯学部有床義歯補綴学講座
2024 年 4 月 1 日

このたび、日本大学松戸歯学部有床義歯補綴学講座教授を拝命いたしました伊藤誠康

と申します。本紙面をお借りして、日本補綴歯科学会会員の先生方にご挨拶申し上げます。

私は、1992 年に日本大学松戸歯学部を卒業後、日本大学大学院松戸歯学研究科（局部床義歯学）に進学し、池田 直教授、松本敏彦助教授（当時）のご指導の下、顎機能と聴力系機能との関連に関する研究に従事し、学位を取得いたしました。その後、同大学補綴学第Ⅲ講座池田 直教授、顎咬合機能治療学講座松本敏彦教授に師事いたしました。2011 年には河相安彦教授主宰の顎口腔義歯リハビリテーション学講座と講座再編し、有床義歯補綴学講座となり河相安彦教授に師事し、地域在住高齢者の口腔機能に関わる研究のほか、有床義歯による補綴治療介入を通じた口腔機能全般との関わりについて、研鑽を積んでまいりました。

日本補綴歯科学会では、これまでに規程検討委員会、修練医・認定医・専門医認定委員会、選挙管理委員会を経験させていただいております。これまでの学会への貢献は微々たるものでございますが、今後はより貢献できますよう誠心誠意努力する所存でございます。浅学非才の身ではございますが、日本大学松戸歯学部ならびに日本補綴歯科学会の益々の発展に少しでも貢献できるよう、一層精進してまいります。今後とも先生方からのご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。



金澤 学

東京科学大学（旧東京医科歯科大学）
大学院医歯学総合研究科高齢者歯科学分野
2024 年 5 月 1 日

東京科学大学高齢者歯科学分野の教授を拝命致しました

金澤 学と申します。私は 2002 年に東京医科歯科大学歯学部を卒業し、同大学の全部床義歯補綴学分野の大学院に進学いたしました。大学院修了後に同分野にて、医員、助教、講師を務めました。2013 年にはカナダのモントリオールにある McGill 大学に Visiting professor として Jocelyne Feine 教授のもと、1 年間補綴医として、インプラントオーバーデンチャーの臨床研究に参加いたしました。2019 年にデジタルデンティストリーに関する研究、教育、臨床を行う分野として設立された同大学歯学部口腔保健衛生学科口腔保健工学専攻口腔デジタルプロセス学分野の教授を拝命いたしました。2024 年 5 月 1 日に前任の水口俊介教授の定年退職に伴い、高齢者歯科学分野教授を拝命致しました。この高齢者歯科学分野の歴史は古く、昭和 35 年に歯科補綴学第三講座（林 都志夫教授）として設立されました。昭和 59 年に長尾正憲教授が就任され、平成元年に高齢者歯科学講座と改組されました。その後、植松 宏教授の高齢者歯科学分野と早川 巖教授の全部床義歯補綴学分野を経て、水口俊介教授の元、平成 20 年に高齢者歯科学分野として統合された分野になります。高齢者歯科学分野では、口腔デジタルプロセス学分野で得たデジタルデバイス・ソフトなどの技術を駆使して、東京科学大学歯学部として理工学系とコラボレーションしながら世界の補綴歯科・老年歯科をリードし、超高齢社会という課題を口腔の健康から解決することを目指し、47 名の医局員一丸となって研究・教育・臨床を行いたいと思っています。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。





隅田由香

日本歯科大学生命歯学部
歯科補綴学第1講座
2024年4月1日

2024年4月に、日本歯科大学生命歯学部歯科補綴学第1講座教授を拝命いたしました。本講座は、歯科補綴学教室から歯科補綴学教室第1講座として設立され、山口英雄教授、柳田尚三教授、小林義典教授、志賀博教授らによって、数多くの研究論文、研究者と臨床家が輩出されています。

講座で執り行われてきました内容は多岐に亘りますが、中でも特に、下顎運動機能、咀嚼能率や咬合力などに関する臨床的研究、咬合と全身との関連研究は、講座の根幹を担っています。今後は、叡智に富む講座の先生方と共に、医療人の育成、補綴の面白さの伝授、社会に還元するための研究の継続、そして臨床では、患者中心の歯科医療の促進、補綴歯科専門医の育成など、教育、研究、臨床のすべてに一丸となって取り組んで参ります。

講座で執り行われてきました内容は多岐に亘りますが、中でも特に、下顎運動機能、咀嚼能率や咬合力などに関する臨床的研究、咬合と全身との関連研究は、講座の根幹を担っています。今後は、叡智に富む講座の先生方と共に、医療人の育成、補綴の面白さの伝授、社会に還元するための研究の継続、そして臨床では、患者中心の歯科医療の促進、補綴歯科専門医の育成など、教育、研究、臨床のすべてに一丸となって取り組んで参ります。

浅学菲才の身ではございますが、公益社団法人日本補綴歯科学会のこれからの発展のために、努める所存にございます。今までのご厚情に心より御礼を申し上げますとともに、今後ともご指導とご鞭撻を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。



熱田 生

九州大学
大学院歯学研究院口腔機能修復学講座クラウンブリッジ補綴学分野
2024年7月1日

この度、2024年7月1日付で九州大学大学院歯学研究院口腔機能修復学講座クラウンブリッジ補綴学分野の教授に就任いたしました、熱田 生と申します。本学会誌を通じて、日本補綴歯科学会の会員の皆様にご挨拶を申し上げます。

私は2001年に九州大学歯学部を卒業後、寺田善博教授の歯科補綴学第1教室（現クラウンブリッジ補綴学分野）に入局しつつ、解剖学第1教室にてインプラント周囲軟組織や歯周組織の研究に専念し、2005年に博士号を取得いたしました。同年12月には補綴学第1教室から第2教室（現インプラント・義歯補綴学分野）へと移籍し、古谷野 潔教授、後任の鮎川保則教授のご指導の下、教育・研究・診療に18年間従事してまいりました。

この間、2010年からの2年間は南カリフォルニア大学に留学し、幹細胞研究などを学ぶ機会をいただきました。また2017年からは、同大学に新設されたGC寄附講座に准教授として着任し、骨補填材やGBRメンブレンの製品開発や評価に携わってまいりました。

日本補綴歯科学会におきましては、これまでに理事長幹事、JPR編集委員、日本補綴歯科学会誌編集委員、そして現在は特命委員会1副委員長を務めさせていただいております。この度の教授就任を機に、学会の活動に一層貢献できるよう、引き続き努力してまいります。

最後に、15年ぶりにクラウンブリッジ補綴学分野に戻ることができ、大変感慨深く思っております。まだまだ若輩者ではございますが、九州大学大学院歯学研究院、そして日本補綴歯科学会の発展に寄与できるよう、これまで以上に研究・教育・診療に励んでまいります。今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

【投稿募集】

Letter for Members では、各支部の学術大会報告、日々の研究の報告など、会員の皆さまの投稿をお待ちしております。採否は事前にお知らせいたします。

投稿は、公益社団法人日本補綴歯科学会事務局（jpr-edit01@hotetsu.org）まで、メールにてお寄せください。